



英名事考 下

中村俊定文庫
文庫 18
673
2



少仙や〜
 芭蕉も如胸〜
 少後也〜
 美作も来夕〜
 足跡を去人〜
 朝〜
 鼻息の〜
 葛蒲蒲湯〜
 盛く〜



琴太句集

三編



秋之部

立秋

少〜
 芭蕉も如胸〜
 少〜
 美作も来夕〜
 足跡を去人〜
 朝〜
 鼻息の〜
 葛蒲蒲湯〜
 盛く〜

市井有感

仇をら〜小判も相入りては

古稀の婦

血ま〜むやあよ七月七夕度

七夕

秋千〜松よから〜玉の川
磯娘入石やを〜らん樹の裾
宵に石の気〜とまれ煙素
か〜風よゆき〜乃指涼

縁中三首

鶺鴒のた〜伊豆〜薩摩山
立突〜之穂乃松風〜
久能〜し早お籠〜
おの〜お籠〜
おの〜お籠〜
おの〜お籠〜

角田川縁娘乃〜
の神土門を〜
を縁を〜

ついでに片は暑気海に打たし七橋と
題しついでに二里をたたくは
あつたきし架

七橋

七つやたしお月七の夜

鶺鴒橋

かゝるお水橋場も古き其の形

紅葉橋

連片し橋のたしと組し

おしのこ

そらしつるの橋と浪河

夏浮橋

早瀬やうき橋し家夏一夜

叫のは

きれしや橋しうれんあを

文をたし

あ早しおのち橋しをり屋し

子よ供しし中人よ花もたしとほ
たせ地を洞のそと極し又まきしはあへ
の歌よたあしつもゆきまき世の舟よ

子成ゆめあのみ御うきしんは御所
あも感引せ給ふ下もさうし道
を雅きいひても御あきいん
ましとのこせあけんはあし
初午よとて年かこし知子の小藤工
と御短天かこしけ 歌なき指ひ
あしあし

七つ子や歳日よこしそ 早はあ

葦

あはらほや起く若水の玉指首
葦やよーやうあ〜葦と
湖歌やらよ概ま川おれを

葦葉の質の備よお歌う〜い

葦や基佐う質も〜あし
あ〜あのと〜あ〜あ〜あ〜あ

焼籠

焼籠やよ〜あ〜あ〜あ〜あ

魂糸

糸は〜あ〜あ〜あ〜あ
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

家〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ

月皇信更魚又ホシ魂をなす

玉ころやさめく列草枕

柳野や麻乃名子帆をよ

写昔く秋魂に水命し

きほまき守ちよひまのた

星は初骨くくくくく

病後

何くくくくくくくく

生此魂

子母くく尾くく生身免

盆月

幼もくく母くくあ

躍角力

行りくく廿日くく

子あてく九人くく

稲妻

いふくくやおくく

丙午の秋信水くく

くくくくく

稲妻の一万人居る堀の版

花火

中洲のふちをたもと堀の垣越え
舟の陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた

冬も春も花火

冬も春も花火

花火の行方

町内を走りぬる花火

夢みおのよー中洲のふちをた

秋草

白き花の裾をたもと堀のふちをた

無き花の裾をたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた
もとの陣引くをたもと堀のふちをた

花火の行方

花火

花火の行方

花火の行方

時分〜〜〜し〜〜〜守英人等

秋の夜半画〜〜

祀喰み牛も〜〜〜傳見世

閑夜

お乃由太き〜〜〜三

〜〜〜ま葛乃心丸

美子〜〜〜山乃歌

は〜〜〜葛も〜〜の
か〜〜

忠

佳の〜〜枕の井〜〜原

回〜〜

お〜〜〜ハ〜〜の声

松庵〜〜風致を〜〜

色か〜〜松む乃軒瑞石

隅田川〜〜

世〜〜れや忠〜〜の信

咲〜〜〜

お〜〜ハ石〜〜魂あ〜〜

秋ははるかにあそぶ

陣や若葉の陽いさげん

後東遊を悼

子うねあそぶ東の道さよほくおる
とらふをのこの雲井の晴ゆるさ
晴ゆる空也よさほ。梅乃上

萩

あつたまのりねるがらぬ萩の声

伊勢のまゝ周をひらむ

清き萩の友行のり便りの

秋風秋水

梅風のうららかにあそぶ。葉細山

二月の路路河あそぶ。花た人の山莊あそぶ

梅とらふと梅水涼し。林の風

いふことと之道あそぶ。梅と梅と葉
とさふ山吹たし。あひま。梅乃上
梅と梅とあそぶ。梅乃上

梅乃上

梅乃上のかほりも梅乃上

君う代々二ふ十日も物こそ終

振る序の振る四時を振る虎の

さくふよ二百十日の虎

川海先や各と遊く秋乃水

玉川よわら

燈籠や書文よる板の

まのふの秋洪

落葉の飯よかむや秋乃水

秋雜

秋くま胡粉吹く葉乃水

秋の故き血ふゆれくも

中川

水原一秋虎宮水かきり

明子

里人今も山より先ぬ

漢草親言

木兔や人を小きくも

飛戸原神像

柳堂... 涉連歌の時... 天下二幅... 神像...

う... 神安

天國の涉海を詠へ

はつ... 神安

是は... 此は海をぬけ... 神徳...

あ... 稻乃花

穂の敷... 画

い... 神

草應物賛

筆取... 養者草

山清

ま... 友

向秀

笛... 神

阮咸

如... 神

三回忌

露を相の骨法く草塚の下

七回忌

と路人えん耳よ枯くも松乃秋

浮城守の古志の亭の玉相乃白のわきく
松乃舎のくわきく其のわきく松乃の令
よき常の志く松乃の白く松

のくわきく山舎世くも雲乃妹

神田祭

神田く秋乃海の白く松乃

耳谷く松乃けく松

く松乃松乃松乃松乃松

額白目切

鑿乃乃石乃松乃松乃松

武乃國分寺

擲乃乃瓦も乃松乃秋乃松

玉川

彼布乃付白く松乃松

分松村く

ふる人よ秋の夜終る太平記
西の柳と鶉の画

梅の空さみけれく又くさる時あり

性呂間人歌画

夏は山々紅葉みあさうは秋の暮

竹篠く在る時、湖ふりれる多る花ハ
よししあふりしこと旧事、ゆきし
さしきし帯のさゆさゆの歌

あつらひのさしはねを秋の雨

壬寅七月八日ありて画さるるものあり

魂も入るまじはしるるはこれ半年の
心よこめり道を今もゆひ捨つるる事
あつらひのさしはねを秋の雨
よししあふりしこと旧事、ゆきし
さしきし帯のさゆさゆの歌
さしきし帯のさゆさゆの歌
さしきし帯のさゆさゆの歌

滅しるる西志のめりるに

自像

魂の入りしもの程好むる

八百里の先へつれゆくは今の心なり

造り或は畑より一し竹中水にうつり
いんじんをたきし材をいし
あさかりしと御よめは正代の
なまじし

あまもたうあまりうふ里の秋
魚んまふ花よみやう博かん

八朔

八朔乃竹よまの旭々
梅とるあれ星月

箱

ふ代よくよ君ふ代のきりい

あまのち箱はほの隣の隣山持
まねとまのけいじんふめ
くく産種をかきつるよま
乃あもりり世入をま
十日二言廿日七産種を
と八かきね田つる

六尺乃箱たうあまりう年代記
あまのちねと二日十日

よま産種列

つ先くつとねあめり
あまのちね母の成信うら

八木種を師屋きねあまのち

五方

江島法樂

此神乃玉の神はくちの事おふ二

月

三月のよき〜 火のくみ鏡層
新月やあ〜 のくみ隅田川
先月の源はま〜 の源鹿月
明月やれ〜 の火のくみ花はくち
春のよきの反哺の〜 のくみ

明のくみ花を〜 のくみ鹿の角
春のくみ源はま〜 のくみ
何〜 のくみ源はま〜 のくみ
海買のくみ人〜 のくみ今月
くみ源はま〜 のくみ酒〜 のくみ二月堂
名月や後乃〜 のくみ源はま〜 のくみ
明月や春〜 のくみ源はま〜 のくみ
冬〜 のくみ源はま〜 のくみ小舟
春〜 のくみ源はま〜 のくみ

不忠也

水と又濁よれは侍川乃月

筑波遠守

いろちれ山居さうくまぬの月

西國垢雞

桂男や垢雞の帯も玉をたれ

回相の契

久々中乃くや如き拂子

中乃院のぬいけはぬかたてき貴大師の

け敷のむ魚も花ん月の雲

作のふお山のき像をゆりぬくゆり
佛容の憔悴しる六年平山の難けゆひ
やもてけしも多うとよよあん有るを
早をわたりおし香煙は焼けぬひしを
角田川の水は清めきんしきき依ハ此
川下ハ銀無言出次の下し今左右ハ
名々伊園志乳山影を望し川上ハ
又新基をくら流木をよそハ河津院佛
をきんもきぬひ一耕をいここ安堂一
ひあよよえ木の名ありしや彼は園縁
はしきき流木とあれなりきしけし
けしけしけしけしけしけしけしけし
中乃院のむ魚も花ん月の雲

結谷蓮生馬上歌

まゆみぬをりりるは捨く西の月

あつむすひし仙舟の嘉慶房ハ十と寄
八と世の老も朽をぬかぬをたふし又
手は入んく力を合せ二間のまの房は
つねに建く月くの雅道をうりて
つれづれに

新月月々遊はあふ凡そ一程

駿河の脚乃以は名月も今も
朽をたてては武蔵のふいねに
たれたるの徒乃くくあや

一ヶ月みおれ流るる毛いそふ人

まのぬし十二層と叫ぶは四時
よれう十二層と叫ぶはこれハ
富るる先ら存も十二卷

富るる先ら存も十二卷

ての六の飯清水くまの
あつむすひし仙舟の嘉慶房ハ十と寄
八と世の老も朽をぬかぬをたふし又
手は入んく力を合せ二間のまの房は
つねに建く月くの雅道をうりて
つれづれに

美勝を碑くあふの月

水乃月人らと打く流を祭

水中素花老人の巻

水魚とあふはあふる月とあ

文瓜亭よりあふる

此宿の娘くまじし懨乃月

蛇の巻の舞を舞せよと乞はく

程くみ来る秋風さう浦の月

程の後つゝと聲

明月の芽と夏よの暁つゝ

日は谷稲を造る

鏡屋も氏子乃月乃光の婦

草村古吹を吹

一 汝も我月よりつゝ先住人

日光寺の鐘

碑て六三子乃中 漸の月

天城山

唯月乃都もあらんて城山

或る中白牙の新巻を全

朽れれ桂なるも月乃宿

昔は是れ之種のみを完する様を記して

親よりつゝ見よわめ 芋名月

五常を擲るれをゆくり

後あふ柱一本身乃友

吉原の月

歎息る前庭も古く東山

猿画賛

その井の留猿の身と水月
を川辺の空に映る乃香かえ

鮭

布川の鱈の二寸八寸の首よきものも
鱈の地をみるんしものそと見ゆ
うらみたる鱈かおはらゆりて

初鮭やふく〜記もよおし

蕃椒

佐竹

毛刀ハ鉄より〜や産草子

秋若草

秋〜けや鬼一口ハ襟け

秋若草や秋若草は〜傳九郎

落水

錦乃香々〜水の水

行あめく 行く 喜ぶ こと なる

鳥

きりぎりす 木城の 鳥かき 鳴く

堀部井

堀部井 堀部 井 堀部 井

堀部井 堀部 井 堀部 井

堀部 井 堀部 井 堀部 井

堀部 井 堀部 井 堀部 井

堀部 井 堀部 井 堀部 井

大倉御所

堀部 井 堀部 井 堀部 井

堀部 井

堀部 井 堀部 井 堀部 井

堀部 井

堀部 井 堀部 井 堀部 井

鳥

堀部 井 堀部 井 堀部 井

堀部 井 堀部 井 堀部 井

雪の穂よさめ母を待つ

雁

身よりのも神よりの入る声
里くくつこち層首る雁

田家

乃りく笑しき里家

玉名山下松蔭亭

丁井よの幅よりまへ浦辺

おき

心よりの好屋よえおき
雁おき入の岨屋お下りおき
望人の母よく候る候るの候

菊

菊の秋よき世の人乃作
花よりの白き花お井入花
おき甲斐よえんや色菊
よも菊よめさおき
二の秋の候よまら菊

一 此亭なる
後園とて実なるは尤も園と

今更らるゝ庭園とて 菊乃宿
福衣油子等とて 記 菊日記

大梅をよみし

菊乃宿とて 牡丹咲す。其のふ
菊山より 秋白りてきく合

一 乃子存記とて 中家の法を
免くしとて

於ては 菊乃宿なる 菊目付

新ちて 菊乃大名の山路に
菊乃宿とて 菊の庭ありて

菊乃宿 甚葉山とて 菊

此乃山とて 祀 菊乃人 菊乃
菊乃宿とて 菊乃人 菊乃
菊乃宿とて 菊乃人 菊乃

地とて 菊乃人 菊乃宿

須坂の君乃 菊乃宿とて 菊乃宿
菊乃宿とて 菊乃宿

斗の秋のこころのまゝに菊は開

菊の秋の画

酒をうゝあゝとけり人淋の菊
をのつゝ空庭の雨のまゝ

柿

生蓮の志々々秋のこころ熟柿の

栗

幻来ははるまじ

栗のあゝあゝとけり人淋の菊

信長西本庵入道

むす栗のあゝあゝとけり人淋の菊

后月

川々水々川々後月の
橋中々流々月みえ秋は
美々木々木々十三年
盤利れ后乃月々々々

つらつらとけり

あゝあゝとけり

赤くも月神天下下乃高信止言
 路ゆくはつち番くくちかろくれえ
 三子居の軽き屋くめて天層居の何り
 中入もまもはは清白をくたなり
 借しは路くくく昔も好む河清沙の
 一ひも路もほししいあつを皆冠よ
 てあよみりるもま一まいふかろく
 乃う金りまれも月えあし借けり
 くの路の束いれもあろくちり記
 なを二三ま折くそのたまきこり
 傍の小波を濤は一の山崎乃葉店
 十もまはまそ切をかりし風も
 およめひれを好むゆいせ
 文の路もま

来よ月流十三言くは来り手抄人

是をいへらるるへ先ばの書を

懸めやさんと虚舟三輪体座乃補財を
 以ていへらるるへ先ばの書を
 常持寺を師乃塚あしおのけり
 是をいへらるるへ先ばの書を

十月み一字りすれあ十三夜

十月半言くく西忘なふ今日く
 なるくハ彼寺おる祖の山命傳
 われえは今くまもくれくも月めく
 五歌くすつめ山層居の塚をハ
 樹根ありやのまひより今もせし
 とくくもけなれくの書
 せりくく定めくく

鹿

ふれけりてはてや花乃を
ちり果し花よみせりて鹿の角
もみちる葉しるべしし鹿の角

壽老人の積

斗せりて歳を代りては鹿の角

紅葉

浦島子

先しとて秋の初をたるとは初め

東海寺

秋をてりては初めは紅葉

初めは初めは初めは初め

風堂うはふ山松乃日和

冬をてりては初めは初め

此は山松乃日和の昔義貞朝臣
有信の御筆なりて今も御筆なりて
一本は古松の葉なりて

冬をてりては初めは初め

碓

遠くは初めは初めは初め

内藤

昔成り去るは時を知らず

何れも皆く破れし人様も

秋暮

もよおすあはれ山を
越えしはあふ梵海や秋のくれ

野徑

此れ人の心も路もせぬ人の心

唐詩

常ら居るは誰か時をわらふは

白鷺社

去る世のなまじきよき人秋の心

墨水

悔れ空しく時を暮るは

行徳を徳頼と上人の指

去る人念も路も秋の心

暮秋

秋の心は時をわらふは
悔れ空しく時を暮るは

約集下

新六

つら〜丁未九月五日の初句を
おぼろしき夜にうつくしき
又此の句は一首のまなまのつら
まなまの歌をこゝろに
おぼろしき

全集
三編

蓼太句集 三編

冬之部

時雨

まふおちぬ〜ぬけ〜初時句
月〜下〜
此の金尺〜
暮〜時句〜

句集下

海をへきい海への志られぬ
中流の志をなす時を今を
つ

浪を

夏を過すも秋も過ぎし時を
何人の舟が焼く山を

何れも夏の妹の成はるるもまた
乃歎けし時を過ぎぬをいさへて

お母を人乃志られを法おは

小春

お秋の法やしきまの森の

まのつらつら他へか
なつたも里人の心
と中流もさな山の

蓬葉のたむけを山を

子来り日南堂

松風を炉の中を小春

鳴る

行ねるも鳴るも
落し一人の心ぬを
行柳を葉を揺るる

阿波の門入はあまの少言を侍れり
古今の角。之瓜はあまの瓜の母命と
言て

うさふさうさ梅の御えん

小言風といふるをささきと云ふ
古園をいふ

道くも尺もあはの世入馬

在滞一周忌

御花志よき事のま見え

西三原まじり

此千あまの神ま月也梅乃忌

水仙

あはつよりあまのこころを

芭蕉忌

十月あまの御もを河の御

芭蕉忌やあまの御もを河の御

はまの御もやあまの御もを河の御

芭蕉追福千句まじり

あまの御もを河の御もを河の御

百回忌取紙

正平八代帝衣を御正洞一の系

文臺替

大世代忌や前給せぬらも造る形

瓦葺云羽像前

足跡を七尺去さす 手見の形

先師昔々のついでりしりて寛保未成を
芭蕉嵐雪の意忌成時を(すま)手にし
此後きつりし日けつりての儀かたを
しれまゝに 行人多し 早くも御
り給りしを初め上流賦して御居

水くぐりしと影のまね押し

多おもれも南無佛指り手向ふ

正命傳

はる後々裾川傍の逢ふ後

納豆

朝くまをすお板えり 納豆愛

枯野

中尾一ねりしりてせり松の原
人通らぬのぬりしりて

棟火より焼すはば 枯を糸
とよむるにや 若草のつとむる
冬籠

みよまの何れも 風のすまひ
らり 扇中 なるや 冬籠

振る亭の何れも 吐き出す 松の
標をいれし 如きを 白葉の 一冊を
眼を定むは 万葉の ちよと
そのう月 松山も 照らす 三巻
とらぬ 野 一 積
眼をいれし 松山も 照らす 三巻

松嶋も 須磨も ともして もゆ花

西舞持 愚鈍画 日向 布袋 赤と 利の 雙

鼻の 魚の 母の ちよと 冬 ちよと

紙衣 山中

縁 ちよと 隠も 糸 海す 紙の ちよと

古す 松女の 玉子 金作 底はし
う 漢を ちよと ちよと

ちよと 柳 ちよと 糸 山中 糸

雅摩 積

一 ちよと 何れも ちよと ちよと

霜

霜風や在のいさく月影の
戸してと分入る眉のまおね
まくお清くすくもさる志を夜に

待必庵信丈
明石菴白牛
愚得坊龍腹
雪牛定竹童

風一忘葛丈
立野氏岷水
無夏菴大耳

けくはたあまの月影の
あまの月影の
い乃さるまの
遠をいさくし
霜をいさくし

霜月
あまの月影の
い乃さるまの
遠をいさくし
霜をいさくし

霜のいさくし

霜子舞

霜のいさくし

霜

いづれも中よりの物もさき
去風乃井ふ道(りまも)女ら
汐もぬ松もかゝるむし
流路切子鳥や月入はさる

流路書しつらぬきよき

吾も鳥の向やあらら架

子も鳥の向

書かよく初の海乃中らる

山あきの流路きん三年の遠目と

之れ乃好まおむの流路をきりて
の里むかす

と後人の向もかよるる

顔見世

鳥見せや二ゆあ言よ又

の序もせや人よあそく

山下金作の流路は是れく海路の
見負の許より幕路のよる

顔もせやゆらん花のさる鳥

冬月

手さうらハつ付し横へし冬の月
も絶乃月何世すし森るる笑

可たう書失ししるは悼むを以

冬其月海くひりしは鏡の如

鰻 蛎

飯乃眼の毒何しそまよふんを以し
のまよしは洗垢乃るも其月
常々蟬やむしり外おの小はふ

冬 雜

まおしきも青峰の葉の冬不し

ひりあ敷のほより松濤と風更ふ
余のあしは初め七人の敷ふ合
きしむししむし付

お髪くえしハ着し 枯荷

三方部の片法合果するは遠くを隔し
まよへし神中月入るは先上りま
訪つ宝光園不登し

山うおは乃るまのこまは

古たつ何の山里六部仙の舞白ゆひ
ゆ七周乃はるる志路ふ今おた何
中をくれ

為藤下

三三

一と時を白くする浦の月夜

風宿妻婦賀

月をみればもれぬささき

几童を偶田川へ使ひ

うちぬく見えぬまきの南田川

マキ一 冬をさす月を何とて新か
このまき一 正門二里の体は初夜
うさぎ一 古のやれぬ心は夜をさす
山藁うさぎ千層の我ら新をさす
まき店まき一 送て

先付けめらるる心もわらわら

又江戸屋敷連舟を繋ぎて眠り
ぬかすを

顔みゆやま海をを橋のうさ

不審屋敷送つまき一 妻

梅の流るる月風をを後さす

海濱の遠くを遊るる男の雛

梅の流るる画

早き心し黙を糸を巻海衣も

梅の流るる所走の果乃家もさうか
考布ははるる心し黙を糸を巻海衣
夜を橋

松戸や明走の果乃露二つ

寒

多分不入りしり

肉麻をいよひ誰くまの入

部はさういふと驚きさういふ

まじ

汝も餘り毒みぢくおれ

火桶

金酒く初みか熟り火桶

承る橋を

舟鬼の泣きしり火桶

悼六志

何指せん骨しりおこ冷巨怪

夜格う毒を失く

おしりひらり巨怪の泣き

山

岩屋よ如きしり笑う

おしりひらり巨怪の泣き

空岩垂るりか歌

新山虎子に時道も驚かす

神魚三首忌

千七もや中八岩のそびる言

看

看るるりく君詩をみ流武有る言

大津繪賛

振るるるみ流も有る水眼もいお

津鼓 きこま

おあ川のきこり淋しをら鼓
利換し戒るるやを人あき

大津絵賛

十八名鬼も守りしやまもい

氷

湖く氷も青る早いく津
高あ中や氷乃上の控をう

まを切店あえ

芦もあおるる山ん洗芽

季札

予未だ能くしるす也

菊

空の葉や水屋のありは

空の葉は花のつらふ

寒の菊や秋空よりハ

雪梅

之梅もさきづつと

何處遠くさきづつと

あけや春の初〜冬乃梅

雪

仮おめよ雪〜もまされたり

あけや春の初

袖はま〜も

白〜雪乃

白〜雪乃

あけや春の初

あけや春の初

秋つしりくも山にまゝさす
春くはつしりくもさ乃がくれ里

草巻

琴のしらべ雪を感す
良人さむ人やお人平は言
心妙う猿人は

天台山下の隠士を訪ふ

鶴の口をさすくく白の井

六段賛

宗澄 守武 貞徳
宗因 季吟 芭蕉

六人乃六毛の白く雪見の

大石良雄を九けの画ふ

君のおうまぬらうやを九け

之態よをさすゆら毛を九け

秋子色も布袋も造れ雪を九け

曲肱太平捧賛

曲肱の心香よ捧ありもさくは尺牘
まよふまよふまよふは流を裁也是の
推す馬よよはまよふまよふは流を裁也是の
まよふまよふまよふは流を裁也是の
まよふまよふまよふは流を裁也是の
まよふまよふまよふは流を裁也是の
まよふまよふまよふは流を裁也是の
まよふまよふまよふは流を裁也是の

乃孫を我く見奉り本堂りを制し
の草を食ひしれは神山は守持の
眼を曲りし母孫や摩りし母味を

後すめ世はくくくくくくくく
をみせ世画くくくく

たしつて絵のおおの色々は
大馬を龍の曳勢

手傳くくくくくくくくくく
鶴卵の殻せしとく

ふいふいふいふいふいふい
事端も何老人をらむ

やうやうもまの老を驚らし
佐藤氏の雷も無く松女は
よのあはれも人の難名も
室乃名もは喜めし
日より時をくくくく
文新りく

とくくくくくくくくくく
そり香の

挽久くくくくくくくくく
帰掃 海掃 夜配

乾坤の中の誰れ一も言ふ事なきの
白雲の如く身を捨ててゆくも
はたしむる事なきのよつとをせむ
時の海鳥の身を捨ててゆくも
たれハ

十指や青白よびり一万度
考りし時より清し勝る
窮る時あつても男やたらは書

市中困居

我若くも勝る一も言ふ事なきの
奉りてめはる衣ハ安一も言ふ事なきの配

君より先計もよびし夜配

歳暮

根原の里老翁の歌

身少くも言ふ事なきの
おと月も捨あつても海走る如
卯祀昔よりむし書や一も言ふ事なきの

三人控へる画

酒を江よ汲む女も言ふ事なきの
己の身も言ふ事なきの

たゞしむる日人故に日かえ
おとすゝ金にまゝに
かゝるる子孫の魂氣光る

法集

橋より見ゆるの坂
年が市更へ人海に月がふ
とりの市豆腐の砂を蓮花を
布留の法乃ゆきくや八市
多路あはく子も片に隅田川

あつし海にのりて
海者くおり年や故に
おとすゝ金の園見は終るおと

おとすゝ金の園見は終るおと

掛とすゝは路をり夜を子

古史の雪堂の事ある史記に二世の
石白の侍てて又白牛は跡原は
牛の道場ありて是先師の
徳を承るる事なり

隣ありし梁より一年は
 方りわき架田長し淋も
 少し乃富自り富水の
 草中し私布刈り草
 大しし十三年持流りし
 終身也英人し如し川
 松風ハ山乃森えし

雜

舞ハる子

夜下し夢也

月を花もさち

夢多太句集 大尾

此集梓行乃時は河津の能成より
~~~~~  
寛政五癸丑年八月  
於平中野松窟山花人午心書之

